

処理を考える(24)

## 数字の読み方が不統一！？

最近、数字の読み方で、校正者から「数字の読み方が不統一」との指摘がありました。しかし、「統一すること自体が間違い」のケースでしたので、あえてとりあげることにしました。

指摘の内容は、戦車のT55、T54、M47、M48、戦闘機のミグ29、F16、などの読み方がそれぞれ違っており、「統一が取れていない」と言うものでした。

こう言った数字の読み方はなかなか難しく音声訳者を悩ませます。普通の辞書にあたってほとんど読み方は載っていません。「エフ、ジュウロク」か「エフ、イチロク」か、戦闘機は「エフ、ジュウロク」ですが、それでは戦車の場合は「ティー、ゴジュウゴ」かというところではなく、「ティー、ゴーゴー」と言っているようです。音声訳者は通称でそれぞれ読み分けていましたが、校正者からは「数字の読み方が統一されていない」となったわけです。こうした数字はどちらかに統一して読むというものではありません。

パソコンなどでもよく数字がでてきます。例えばNECのコンピュータ「PC9821」は、通称「ピーシー、キュウハチニーイチ」ですが、「PC9800シリーズ」は「ピーシー、キュウセンハツピャクシリーズ」となります。RS232Cは「アールエス、ニーサンニーシー」ですが、HP200LXは「エッチピー、ニハック、エルエックス」で、F1などで出てくる車のエンジンのV8、V10、V12は通称「ブイハチ、ブイテン、ブイジュウニ」と読んでいるようです。知らなければ「数字の読み方がまちまちでは」となるのも無理ありませんが……。

拳銃でもまちまちです。コルト45は「コルト、ヨンジュウゴ」ですが、「ルガー 357マグナム」は「ルガー サンゴーナナ マグナム」です。ある本で音声訳が終わる頃に、たまたまニュースを聞いていて本に出てくる拳銃のことが報道され、自分の読み方と違っていたため、後で全部そこを読み替えたということもありました。

こうした数字の読み方は通称ですので、一定の決まりはありません。日頃から、ニュースにも関心をもって聞いておくことや、わからないときはその分野に強い人に確認するといったことも必要でしょう。

## 今月の練習問題

※外国語の処理

### 「始まる前のイー、アー、オー」

朝、七時五十分、学校の正門周辺はラッシュ状態――送ってきたママとキスしあう小さな低学年児から、見あげるほど背の高い若者たちまで、十二学年の全生徒が、いっせいに校舎に向かう。四、五年生までは横長のランドセルを背負い、大きい生徒はてんでばらばらなリュックやかばんを持っている。バイオリンやギターのケースをかかえているのは、学年を問わない。

校舎の玄関に大人が立っている。今朝の挨拶係の先生で、それはたいてい週ごとの当番になっている。

「おはよう、ヴェレーナ」

「おはよう、マチアス」

一人一人と握手をかわす。十二学年で千人近い生徒の名前を、全部知っているとは驚きだ。でもそれは当然でしょう、と、ここの先生たちは特別なことだとは考えていない。

では今日は、これから三年A組の教室に行ってみよう。

今度はそこに、三年A組担任のエーデポールズ先生がいる。担任はふつう、各教室の入り口に立っていることが多いが、今朝の先生は教卓の椅子に座って待っている。

「おはようございます、エーデポールズ先生」

「おはよう、クラウディア」

手を差しだしあって、目を見合う。先生が子どもの目を、短い一瞬だが、じっと見る。この行いが、学校の一日の始まりには欠かせない。フミがミュンヘンの学校で初日を迎えた当時から、私はそう受けとめてきた。

「先生、私、今日は体操ができません」

「どうして」

「足をけがして、まだ痛いんです」

「おやおや、足が気の毒だね」

個別のやりとりもあって、子どもたちは各自の席につく。

全員そろったようだ。八時になる。教室のざわめきが、ずーっと静まる。座っている子どもたちの呼吸が自然にととのってきたと見ると、先生がまず立ちあがる。そして小さな鈴を手に、チン、チン、チン――三回鳴らす。子どもたちが起立する。

ついで先生は、机の上の赤い口ウソクに火をともし。子どもたちはそれを、自分の内面に灯がともったかのように受けとめて、今日これからの学校での生活に心を向ける。先生と子どもたちとの声が合わさり、ゆるやかなメロディーが聞こえだす。青空

をうっすら流れる淡い純白の雲のようなハミングだ。ハミングが消える。と、子どもたちのからだが動く。まず、背筋をまっすぐに伸ばして立ち、一方の手を頭上高くあげ、もう一方の手は足もとをさすようにおろし、ちょうど天上天下をさし示すお釈迦様のような姿勢――そこに、

「イー」

先生の声が朗々とひびく。ついでぴょんと跳ねながら、両足を床の上に開き、両手も頭上で広く開いて、からだ全体が天に向かって少しあおむく。

「アー」

そこからふたたび足を閉じ、両腕を胸の前で丸くかこむ。肩や背中をやや丸くうつむきかげんにして、

「オー」

この三つの動きを二度くりかえす。二度目は先生は何も言わずに、みんなで動きだけをともにする。

これは母音のオイリュトミーだ。基本となる五つの母音にはそれぞれの音の性質からくる動きがある。そのうち「I」（イー）「A」（アー）「O」（オー）の三つを、授業の最初にとりあげる。私たち大人の勉強会や教員会議などでも、この三母音を動くことがよくある。三つにはもっとも基本的な人間の心の動きが反映されているからだ。

私たちも「イー」と胸の奥から発してみよう。まっすぐな光が輝き出るようなひびきではないか。ゆがみやとどこおりのまったくない「イー」を言うとき、そのまっすぐな動きは、私の中の本当の私を目覚めさせる。ドイツ語では”ICH”（私）の”I”だが、日本語で「光」（HIKARI）の”I”、「わたし」（WATASHI）の”I”と考えてもいいだろう。

「アー」はどうか。そもそも人間の内面をおもてに出す母音はどれも、のど先だけで固く発声するのではなく、鎖骨のあたりをゆるめて発するのが自然である。中でも

「アー」は最高度に胸が開いている。胸底の深い奥にその中心を感じながら「アー」としばらく言い続けると、開く、開く、どこまでも私の内面が、外に向かい、天に向かって開いていく。宇宙から射し込む何かを、そっくり受け入れる花瓶のようだ。花瓶はドイツ語で”VASE”だが、「ヴァーゼ」と言いながら「アー」の母音を思いきり開く動きをしてみよう。日本語で「あした」（ASHITA）でも「かわ」（KAWA）でもいい。「アー」の母音のあるところで、自分をせいいっぱいに開いてみる。

そして「オー」になる。「オー」の母音を、ゆっくり心の中から出すと、私たちの胸からのどのまわり、口の中が丸くやわらかいまりのようにふくらむ。私たちの内面が、「まっすぐ」や「開き」とは微妙に違う動きをする。包み込み、囲む動きだ、それも大きくゆったりと。だいじなものを抱きかかえ、やさしく保護するしぐさである。

「大地に足を踏みしめて、前向きに立とう」

「偉大なもの、崇高なものに驚嘆の念をいただき、それを仰ぎ見て自分を開こう」

「かよわく小さいものが未来に向けて育つよう、慈愛の心で守ってあげよう」

こんなモラルの教えを、校長先生が朝の訓示で、生徒に語り聞かせる場面などは、今の点数教育の学校にも見受けられるに違いない。夏休みの宿題の読書感想文で、こういう言葉が書かれるのを模範的とするような、読書指導もあるだろう。

「イー」「アー」「オー」のオイリュトミーは、なるほどそういう道徳教育にぴったりだと思われるかもしれないが、早合点してはならない。こうしたモラルは、決して項目的に言葉で説明されるものとして重要なものではないのだから。

子どもたちはとにかく毎日これを動く。先生もいっしょに動き、説明や意味をつけ加えない。たまにちょっと言及することぐらいはあるにしても、もし動くたびにいちいちお説教をつけていたら、毎朝動く意味がなくなり、逆にマイナスにさえなりかねない。

おとなが意味を知るのはいい。父母会の席で、あれは何かと質問する親がいれば、先生は答える。そして親もその場で動いてみる。

でも子どもたちは、とにかく動くだけ——毎日、毎朝、一年生、二年生、三年生、そう、そしていつしか意味も自覚するようになりながら十二年生の卒業まで、「イー」「アー」「オー」は基本の基本。そのうちに残りの母音”E”（エー）と”U”（ウー）が加わることもある。そして別に必修として独立したオイリュトミーの時間には、子音のすべて、その組み合わせとしての言葉、詩や音楽や幾何学図形のさまざまな動きを学ぶ。そうやって体系的に進んでいく独自の科目は別として、朝の授業開始時の三母音のオイリュトミーは、毎日欠かせない基本の日課なのである。

次に全員で「朝の詩」を朗唱する。

太陽のすばらしい光が  
私の一日を照らします  
心の中の精神の力が  
私の手足に力をあたえます

### 先月の問題の検討

※ 問題は「思無邪」をどう読むかです。著者はこの3文字の読み方が二つあることを問題にしています。最初から一方に決めて読むのも問題のようです。「無邪」（ムジャ）という言葉はありますので、「思無邪」が最初に出てきた時に「しむじや、しは思う、むはなし、じゃはよこしま、しむじやの思想」と読み、あとは「思無邪」は「シムジャ」とそのまま読むのはどうでしょうか。

Q. 放送のことばには、どんな特徴があるか。

A. 広い意味で放送のことばと言えば、放送に出てくるすべてのことばを指すことになるだろうが、狭い意味では、放送局に所属するアナウンサーや記者が放送で用いることばのことを言う。ここでは後者の意味で使う。

放送のことばは、たとえ書かれたものを読む場合でも、基本的に音声言語であり、かつ一方的に伝達されることばである。特に初期のラジオはそうであり、当時はマイクロホンの性能がよくなかったこともあって、耳で聞いて理解しにくいことばや意味の粉れやすいことばは使わない、文は短く、構文は簡単にする、明りょうな発音でわかりやすく話す、といったことに関して、放送用語委員会などを中心に、かなり厳しい指導が行われたようだ。

テレビ時代になって、放送のことばの状況は、ラジオだけのころと比べて大きく変わった。話し手が生身の人間として視聴者の前に姿をさらすようになり、話し方に癖があったり、方言的な口調が混じっていたりといった、かつてなら放送話者にとって欠点とされたような資質の持ち主でも、全体の印象次第では、むしろ独特の魅力をもった話し手として評価されるようになった。ラジオ時代には、特にニュースでは、客観性を保つために個性を殺した読み方をするのが要求された。テレビ時代の今日では、ニュースを含め、もっと人間的な自然な調子で話す――読むのではなく――ことが求められるようになった。

とはいえ、放送のことばは基本的に音声言語であるという事実が変わりはない。放送のことばに関して第一に心がけるべきことは、今もやはり、耳で聞いてよくわかるように話すということである。親しみやすく、魅力的に話すことができれば、さらに望ましいことは言うまでもないが。

## 『言葉に關する問答集』文化庁編より

**（問）** 「末期」(まつき・まつご)「評定」(ひょうてい・ひょうじょう)「食堂」(しょくどう・じきどう)の読みと意味。

**（答）** 漢字二字で書き表される語の中には、二とおり(以上)の読み方をもっているものがある。そして、そのどちらの読み方によっても、意味が同じであるもの、すなわち、発音がゆれているものと、読み方によって、意味も違っているもの、すなわち、別語であるものがある。なお、読み方の違いという場合には、例えば、「黒煙」の「こくえん」と「くろけむり」、「今日」の「こんにち」と「きょう」、「水車」の「すいしゃ」と「みずぐるま」などのように、字音読みと字訓読みによる違いもあるわけであるが、ここでは、

それらは問題外とし、同じく字音で発音する語ではあるが、呉音によるか、漢音によるか、又は、慣用音によるか等によって生ずるものについて述べる。

このように、一つの漢字に、なぜ、二つ以上の異なった音があるのかと言うと、それは、中国での発音が、地方によって、あるいは、時代によって異なっていたためであり、それらが時代を異にして、我が国に輸入された結果である。

以上のうち、「呉音」は、中国の江南地方に行われていた南方系の音で、それが三韓を経て、我が国に輸入されたもので、時代的には、最も古いものであるといわれており、今日では、仏教関係の言葉に多く使われている。

漢音は、我が国と中国本土と直接に交通が

開けるようになってから、伝えられた北方系の音で、呉音に比べて、新しく入ってきた音であり、今日の我が国で使われる字音のなかで最も多く用いられている。

唐音は、鎌倉・室町時代以降に伝えられた宋・元・明・清などの時代の中国音に基づく音の総称であり、これを唐音というのは、「唐土」（すなわち「中国」）の音というほどの意である。唐音を用いる語は、極めて限られている。

慣用音は、呉音・漢音の体系とは異なったもので、我が国でなまったり、誤ったりした音が社会的に広く行われ、定着したものであって、かなりの数に上っている。

現在、この呉音・漢音・唐音・慣用音の区別は、一般には、ほとんど意識されておらず、個々の語によって、いわば、読み癖として、それぞれの音で読んでいるのであり、一語を、呉音と漢音、あるいは、漢音（呉音）と慣用音とをまぜ用いて読むことになっているものも少なくない。

#### (1) 末期（まつき・まつご）

「期」は、漢音「キ」、呉音「ゴ」（慣用音とする辞書もある。）である。「まつき」は、物事の終わりの方の時期の意で、これを別の漢語でいえば、意味に多少の違いはあるが、「終期」である。一般に、広く、いろいろの物事の行われる期間、また、ある時代の終わりのころを表すのに用いる漢語である。これに対し、「まつご」は、中国からきた言葉ではなく、我が国でできた言葉であり、やはり、物事の終わりの方の時期であるには違いないが、その意味が限定されており、人の一生が正に終わろうとする時、すなわち、死に際、臨終の場合だけに用いられる。類義語に「最期」があるが、「最期」も「最後の時」の限定した意味を表している。

なお、「末」を「マツ」と読むのは、慣用音であり、漢音は「バツ」である。「末裔・末子・末席・末孫」などは、「バツ……」とも「マツ……」ともいうが、現代語としては、「マツ……」の方が一般的である。これは、昭和二十三年、内閣告示の「当用漢字音訓表」で、「末」には、音として「バツ」を掲げていなかったことが、影響しているかもしれない。（なお、現行の「音訓表」には、「バツ」の音も掲げてある。）

以上の語は、「バツ……」と読んでも、

「マツ……」と読んでも、その意味に変わりはない。

#### (2) 評定（ひょうてい・ひょうじょう）

「定」は漢音「テイ」、呉音「ジョウ（チャウ）」である。「評てい」は、「勤務評定・価格の評定」などのように、ある物事の値打ち・品質・成績などの度合・程度・段階などを、論じ、判断して決める、という意味である。これに対して「評じょう」は、「（大ぜいの）関係者が寄り集まって、相談して決めること」ということであるが、現在では、単に、相談すること、というほどの意であり、どちらかといえば、古語に属する語であって、今日でいう「評議」に類似する語である。しかし、今日でも、長々と相談をしても語がまとまらないことをいうのに、「小田原評定」という形で生きて使われている。

熟字で、定を「テイ」とも、「ジョウ」とも読む語としては、他に、「定席・定例・一定・決定・不定」などがあり、「一定・決定・不定」のように読みによって、意味が違っているものもあれば、ほとんど同じ、又は、似た意味のものもある。しかし、例えば、「鑑定」は、「かんてい」であって、「かんじょう」ではなく、「勘定」は、「かんじょう」であって、「かんてい」ではないように、多くは、「定」を、「テイ」を読むか、「ジョウ」と読むかが決まっている。

#### (3) 食堂（しょくどう・じきどう）

「たべる（こと）」という意を表す場合の「食」の漢音は「シヨク」であり、呉音は「ジキ」である。「しょく堂」と言えば、

(1) 食事をするための部屋、(2) 食事を提供する店、という意であり、「じき堂」と言えば、これが限定されて、「寺にある、僧などが食事をするための部屋・建物」ということになる。同様な読み分けをする語に、「肉食」があり、「肉しょく」と言えば、一般語であり、菜食・草食に対する語であるが、「肉じき」と言えば、「肉食妻帯」として用いられ、もともと、獣や魚などの肉を食べることを禁じている仏教関係者の間で、獣肉・魚肉などを食べることを言う。また、「中食」も「中しょく」・「中じき」の両様があるが、この場合は、読みによる意味の違いはない。

# 利用者から製作依頼を受けている原本

以下のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。初めてのグループの方は何か5分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音状態をチェックさせていただいてから録音にかかっています。

## 書名 <分類>

- 『ニュースキン徹底知識』伊勢龍彦著 <化粧品>  
『IDNハンドブック成分と作用がわかる本』伊勢龍彦著 <医学>  
『「良いものだけ」をあなたに！美しい肌・髪・歯を保つために』ニューライフ出版編著 <化粧品>  
『IDNがあなたを守る これでガン・成人病は怖くない』ニューライフ出版編著 <医学>  
『3001年終局への旅』アサー・C・クラ著 <外国文学>  
『魂の保護を求める子どもたち』トマス・ヨハネス・ヴァイス著<教育>四六判 297頁  
『私のまわりは美しい』松井るり子 <教育> 四六判 205頁  
『臨床理学療法マニュアル』黒川幸雄著 <医学> B6判  
『クッキングブック』リガル・ジヤパン編 <料理> A5判 16頁  
『PHS電話機取扱説明書』日本ビクター 四六判 110頁  
『殺人探究』フィリップ・カー著 <小説> 文庫 490頁  
『地獄からのメッセージ』A・J. クィネル著 <小説> 文庫 400頁  
『カメの衣・食・住』徳永卓也著 B5判  
『クリエイティング・マネー』サネヤ・ロウマン他著 <心理学>四六判 387頁  
『魔法のタワシ 洗剤なしだから環境にやさしい』<手芸> 55頁  
『レニン・アンジオテンシン系と心臓 1』<医学> A4判 27頁  
『レニン・アンジオテンシン系と心臓 2』<医学> A4判 27頁  
『取手方式で腎不全に克つ』椎貝達夫著 <医学> 四六判 242頁  
『福祉国家はどこへゆくのか 日本・イギリス・スウェーデン』  
『シバ謀略の神殿』ジャック・ヒギンズ著 <小説> A5判 250頁  
『腎臓病の生活ガイド』平田清文著<医学> B5判 215頁  
『循環器病の診断と治療』大阪府立成人病センター編 <医学> A4判 300頁  
『ディスカバリー世界の真相への接近』<宗教> B5判 308頁  
『ヨセフとその兄弟 II』 <宗教> B4判 620頁  
『ヨセフとその兄弟 III』 <宗教> B4判 562頁

# 今回引き受けて頂いた 原本とグループ

『ファウスト 1』 高橋義孝著	箕面
『ファウスト 2』 高橋義孝著	〃
『日本人はなぜ無宗教なのか』 阿満利麿著	〃
『江戸打ち入り』 半村良著	テープライブラリーにしのみや
『鎮魂歌 不夜城2』 馳星周著	〃
『アロマテラピーのための84の精油』 ワグナー著	えくてもあ
『ウィーンの自由な教育』 広瀬敏夫著	〃
『悪魔の予言』 日下公人著 <社会科学>	〃
『日本のシュタイナー幼稚園』 高橋弘子著	いこま
『シュタイナー教育を考える』 子安美知子著	〃
『七歳までは夢の中』 松井るの子著 <教育>	〃
『幼児のためのメルヘン1』 スゼ・ケニツ編著	せせらぎ
『ウサギの衣・食・住』 大竹隆之他著	ICCB

## 近畿視情協、 カセットテープ（C-90、C-60）を取り扱います。!!

近畿視情協では、今秋から、Konica XR1-90とXR1-60の2種類のテープの販売を行います。価格は90分が85円（消費税別）、60分が65円（消費税別）です。これは、近畿視情協加盟館が共同で購入することで市販より安くなっています。グループでも購入希望をされる方がありましたら、下記へお申し込み下さい。但し、最低申込単位は200本からです。

記

お問い合わせは盲人情報文化センター内、近畿視情協事務局 宮嶋

電話 06-441-0015

## 訂正とお詫び

先月号で、柿の字を「かき」と「こけら」の二通りの読みがあると紹介しましたが、千葉の北川さんより、誤りの指摘がありました。「こけら」の字は別の字「柿」（8画）の間違いでしたので訂正してお詫びいたします。